第40号　2003年４月１日　平塚らいてうの会　東京都渋谷区千駄ケ谷4-11-9-303 TEL03-3401-6383

おはらいてうの会ニュース

5月24日　らいてう忌

映画と講演のつどい

ことしのらいてう忌のつどいは、らいてうの祥月命日にあたる五月二十四日に東京ウイメンズプラザで開かれます。

プログラムは、記録映画「元始、女性は太陽であった―平塚らいてうの生涯」の上映と羽田澄子監督のお話。そしてらいてう記念館建設プロジェクトチームが調査・分析・検討した第一次の草案、「雷鳥の家」（仮称）建設計画が提案されます（二、三面参照）。

羽田監督

記録映画は昨年三月、東京・岩波ホールでのロードショーを皮切りに全国各地で自主上映運動が起き、いずれも大成功。らいてうとその周辺の女性たちの生き方と日本の近現代史を重ねた映像記録に加えて、らいてうの遺志を受けつぐ女性たちの証言から、多くのことを学んだという感想がたくさん寄せられています（左の写真は映画に登場する人々）。

一年を経て、今後の上映運動を取り組みやすくするために検討の結果、フィルム貸出料が現行三十万円から二十万円に値下げされることになりました。また英語版も完成し、羽田監督には三月二十二日、第二十回日本映画復興賞が贈呈されました。問い合わせは☎〇三(三四四五)五八三三普及センター

平塚らいてう

櫛田ふき

与謝野晶子

瀬戸内寂聴

高村智恵子

青木生子

伊藤野枝

宝井琴桜

市川房枝

小林登美枝

●二〇〇三年らいてう忌

日時　五月二十四日（土）一時半開会

会場　東京ウイメンズプラザホール

らいてう生誕百二十年をめざして
「雷鳥の家」（仮称）の建設を提案

起草委員長　米田佐代子

平塚らいてうゆかりの品々は現在、日本女子大のご好意で保管していただいていますが、これらを保存展示できる施設がほしい、というのが関係者のねがいでした。ＮＰＯ平塚らいてうの会は、この問題についてプロジェクトをつくり、検討を重ねてきましたが、このほど理事会で「記念施設建設」の方針を決定、五月の総会に提案することにしました。どうか会員・非会員を問わず、たくさんのご意見をお寄せください。ここではプロジェクト報告をまとめた責任者として、構想の経過と概要をおしらせします。

米田佐代子さん

▼「雷鳥の家」（仮称）とは

「らいてう記念館」というと、りっぱな博物館・美術館を連想しますが、私たちはあえて「家」とよぶことで、親しみやすく「だれでもたずねてゆける場所」にしたいと考えました。名称はこれから考えますが、「らいてうの家」「平塚らいてう四阿（あずまや）高原の家」なども出ています。場所は信州真田町在の四阿高原、日本百名山の一つ四阿山をのぞみ、歴史のふところに抱かれた自然ゆたかな山林の一角です。らいてうが生前購入した土地で、没後ご遺族によって本会に寄付されました。

信州は、らいてうにはゆかりの深い地です。塩原事件の後、身をひそめたのは松本市郊外でした。そこでみた日没やアルプスの山々は有名な「元始、女性は太陽であった」に登場します。ペンネームの「雷鳥」も、今は長野県の県鳥です。

交通便利とはいえませんが、それだけにらいてうの愛した自然が息づくこの地に遺品の展示はもとより、私たちがらいてうを知り、学び、そして語りあえる場になるような施設をつくりましょう。

▼まず小さな山荘風の建物を

その建物は、まず小さな山荘風にしましょう。もちろんミニ集会のできる広めの居間が必要ですし、「丸窓のある部屋」もほしい。語り疲れたら、そこで一夜を過ごせるくらいのスペースや寝具も、少人数分ならあっていいのではないか。数々の写真や肉筆原稿、文机など遺愛の品々もさりげなく目に入るような展示の仕方を考えてみたい…。

これなら三十坪前後でも可能です。本格的な収蔵庫や展示設備は次のステップで考えましょう。まずはそこで人びとがらいてうと出会い、「やすらぎ」「集い」「語り」「歩き」「楽しみ」「学び」「交流」できたら、らいてうは喜んでくれるのではないでしょうか。

ここを、みんなが「したいこと」を持ち寄れる「広場」にしたいと思います。

▼五千万円募金で二〇〇六年完成を

この地域はかつて「上田自由大学」という自主的学習運動のあった地です。禅やらいてうの子育て論を学んだり、「協同組合」「相互扶助」とは何だろうと考える。らいてうが愛した自然食やお酒を味わうのもいいし、野草採集やバードウォッチング、俳句、短歌を楽しんでもいい。「戦争と女性」「世界連邦」「非武装中立」を論じる機会も、そして信州の女性史や真田町の歴史案内などもいかがでしょう。

建設には建築家など専門家の援助も重要ですが、それだけでなく「こんな建物」「こんなスペース」「こんな使い方」という意見をみんなで出し合い、一致点をみつけながら設計を考えていきませんか。手はじめに東京や真田町を中心に話し合いの会を開きたいと考えています。ボランティアとして活動に参加してくださいませんか。意見をいう人、インターネットで発信する人、車を運転する人、原稿を書く人、チラシを配る人、草むしりする人…。みんなの知恵と力で、二〇〇六年実現をめざしましょう。

もちろんお金は「自前」です。個人からも団体からも大口小口を含め自主的寄付を頂かなければできません。そのために各界の多くの方にご相談し、大きく募金のよびかけをすすめたいと思います。ＮＰＯとして「認定ＮＰＯ」（寄付金の所得控除が可能）もめざします。実際にどれくらいお金が必要でしょう？　付帯設備や展示設備、什器類、当面の維持管理費などを合わせ、第一期目標を五千万円（人件費は別）と考えています。

▼「らいてうは私みたい」と思うあなたに

映画を観てくださった方のなかに「らいてうって私みたいなところがあるのね」という感想がありました。悩みも迷いも、間違いもある自分だから「らいてうみたい」と。らいてうは「無謬の人」ではなかったけれど、つまずくことをおそれない人でした。「光」も「闇」も抱えながら生涯うしろを振り向かなかったらいてうを、今どう受けつぐか。これからつくる「家」がそのような場になることをねがってやみません。

そのためにもぜひ会員をふやしたいと思います。どうぞご協力ください。

できることで力に

理事　花岡　静枝

いよいよ建設の方向が出て、嬉しい！の一言です。

四阿高原の深い林の奥に、ひっそりとらいてうの「隠れ家」があるような雰囲気になるといいですね。真田町では「らいてうの会」会員はもちろん、地元一同自分たちにできることをして、ぜひ力になりたいと思っています。

みなさん、ぜひおいでください。

（真田町町会議員）

イラク攻撃に反対し
武力行使を支持する
政府に抗議します

第40号　2003年４月１日　平塚らいてうの会　東京都渋谷区千駄ケ谷4-11-9-303 TEL03-3401-6383

シリーズ らいてうの周辺

作家・小栗風葉の妻
加藤 籌（かず）子

『青鞜』に賛助員として参加した加藤籌子は明治十六年に愛知県豊橋町で生まれた。幼少期から書と漢籍を学び、小学校卒業後は三河随一の歌塾に入り、『女鑑』の投稿和歌に熱中した。

明治三十三年に尾崎紅葉門下の作家、小栗風葉と結婚し上京。与謝野晶子の歌集『みだれ髪』をはじめ「新しい女」たちの動向を見て発奮。明治四十年に中等教員検定試験を受け、国語漢文の教員資格を得る。徳田秋声や田山花袋など風葉の友人たちから「才色兼備のマダム」と噂され、修文館の依頼で『女子書簡文の作法』を執筆。翌四十一年には『新潮』に「媒酌」を発表して作家として世に出、風葉との結婚生活に題材をとったウイットに富む小説を書き、作家の妻としての鬱憤を晴らした。

この頃、人気作家として頂点を極めた風葉宅には多くの文学青年が出入りした。彼等は当時の風葉の住まいを冠して戸塚党と呼ばれたが、その中に生田長江、相馬御風、森田草平がいた。

らいてうが日本女子大を卒業したのは明治三十九年。その翌年に成美女子英語学校に入学、この学校で教師をしていた長江や御風と出会ったらいてうは、彼等の影響を受け、文学に目覚めた。籌子は長江、草平を通してらいてうの噂を聞き、らいてうも自分とそう年齢の違わない有名作家の妻に関心を持ったのではないだろうか。

『青鞜』創刊前のらいてうは、風葉の親友、沼波瓊音（ぬなみけいおん）が主宰した俳誌『俳味』の常連投稿家であり、風葉の弟子、中村武羅夫が記者をしていた『新潮』に短い作品二編を発表。さらに明治四十二年三月の『活動』には風葉の「老妻」、秋声の「墨液」、籌子の「思ひ出の記」と共に、らいてうの脚本「退京」が掲載されている。

「編集だより」には「退京」は森田草平と「情死せし時の偽らぬ告白であるそうな」とある。『青鞜』前期、らいてうと籌子はかなりの近さにいたはずだが、晩年のらいてうの記憶の底から、この時期のことは抜け落ちていたようである。

（らいてう研究会　安諸靖子）

〔事務局日誌〕

1月10日　第3回事務局会議
1月23日　らいてう記念館建設プロジェクト第3回会議
1月28日　第5回理事会
2月1日　発起人の一人・山住正己さん逝去
2月3日　建設プロジェクト第4回会議
2月14日　イラク攻撃反対大集会に参加
2月16日　婦人民主クラブ（再建）事務所を小林会長が訪問、記念館建設への協力要請
2月24日　記録映画実行委員会に出席
2月28日　第4回事務局会議
3月5日　建設プロジェクト第5回会議
3月8日　国際婦人デー中央大会に参加
3月11日　第6回理事会
3月12日　女性の憲法年連絡会主催のピースウォークに参加
3月13日　記録映画実行委員会に出席